

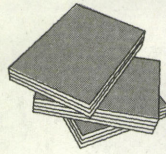
触れ合いの奥で

土屋とく

手と手が触れ合った時、互いの間に流れる何かがある。幼い者に備わっている特性は、澄んだ瞳・小さく・柔らかくきめ細かいみずみずしい肌・行動の活き活きしさであろう。園児たちに常に慈しみのまなざしを注いでいる倉橋は、鋭敏な感覚をもって、皮膚を通しての交流の中で「大人」から凶らずも与えてしまう粗い刺激が、子どもにどのような影響を与えているかに思いを馳せる。

若さの対比は老成であり、経験を積み円熟することを、——心の地はだのなんと粗くなっていることか。時には自省と道徳と作法とでかえっておしろいやけがして、恐ろしい程がさがさになってさえている——さぞ心のはだの触れ合いに心地悪しさを感じているだろう……と、凶らずも子どもを傷つけ、損なう恐れが無きにしてもあらずではないかと憂いている。この文は、外と内、心と心の関係を説き、多くの教えを含んでいると考えられる。

『育ての心』には肌について似た記述が見える。それは「とげ」と題して、——わたしたちの目にとげはないか。言葉に、気分にとげはないか。もとより自分で心づかぬ時のことである。……もとより瞬間のことである。しかし、とげはいつでもちよつとさすものである。



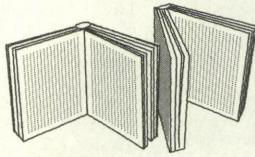
り、その一と突きが、もう相手の皮膚を破っているものである。幼児の心の膚は、その軟らかい皮膚よりも軟らかい。わたしたちにほんの小さな一つのとげがあっても、直ぐいため傷つけずに措くまい——と。全著作の中に、こうした明敏な感性を物語る言葉が多い。

こまやかさ

育てる者は、五感——視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚——のすべてを働かせて子どもの状況をとらえ、どう対処すべきかを考える。動きからその時その時の奥にあるものを察知して、最も適切な仕方を瞬時に選び取って行動に移すものである（場合によっては何も手を下さないことも含めて……）。それは幼い者に対していつも敏感であると同時に柔軟な思考を働かせて、きめ細かく心を配る姿勢があるかどうかにかかっているのである。

倉橋が『幼稚園真諦』の中で、先生の役目は、子どもの生活に対して、心遣いのこまやかさということ、常に気が利いていることと説き、『戦後小編』でも、望ましい保育者の条件として、「気がつく」「手が届く」「行き渡る」こと、つまり、口・手・足・目の行き渡る前の心の行き渡りがなくてはならないと述べている。そして就学前の教育は一般の教育に比して味の教育であり、「ほか「実際家」の外にはわからぬ、人には言えぬ楽しみがあるともいう。

これらはまさに充分にかみしめ味わうべきものであろう。いつか一度深く保育にかかわったことのある者は、一子どもに関することから離れられないと昔から囁ささやかれていると聞いたが、このようなところに密接なつながりがあるのかもしれない。



磨かれる感性

感度の良しあしは個人によって異なる。同じ体験をしても、ある人は少しの動きにも反応するが、かなり時を要してようやく気づいたり、淡い印象のままに過ぎてしまう人もいる。それはおそらく生得的なものでもあろうが、保育者の資質として感性は必須であり要諦に違いない。しかし誰にも備えられている諸感覚は、後天的な環境と努力によつて良い方向に導かれるはずであると思う。

初めて母親になつた時、子どもの可愛さに触発され、慈しみの感情が内から自然に生じて、微妙な動きも敏感に察知する力が目覚めてくるものである。保育者も子どもと親しく交わる中で、また自分を高めようとする意欲があれば、おのずから良い感性は開発されていくのではないか。さらに、優れた感性は教えられるものではなく自身で磨くものでもあろう。

こよなく芸術を愛する倉橋は、学生に一級の芸術に接することをたびたび勧めていたという。教え子たちも機会をとらえては美術館に音楽会に歌舞伎座に足を運ぶことを生涯の課題と楽しみにしたと、後年優れた指導者となられた方々から伺っている。

(保育を深める会代表)

参考文献 『倉橋惣三選集』(全五巻) フレーベル館

『倉橋惣三「保育法」講義録』菊池ふじの監修 土屋とく編 フレーベル館 一九九〇年